



ブラック・パンサー党略史 黒人解放運動における位置づけ

スンディアタ・アコリ著

『自己防衛を目指すブラック・パンサー党』は1966年10月、カリフォルニア、オークランドにおいてヒューイ・P・ニュートンとボビー・シールによって設立された。その後、名前はブラック・パンサー党（以下、BPP=Black Panther Party）となり、都市黒人ゲットー街を通じて、国土を横断し、東部地域へと広まっていた。

1968年の夏、デビット・ブラザーズはニューヨークのブルックリンにBPP支部を設立し、その数ヶ月後にルムバ・シャクルがニューヨークのハーレムにも支部を創立した。私は68年の秋にBPPハーレム支部に入党し、1969年4月2日のパンサー党員21名に対する謀略事件で逮捕されるまで、財務係として活動した。この事件は、政府の全国的なBPP攻撃の第一弾であった。西部では、フィラデルフィア、シカゴ、ニューアーク、オマハ、ニュー・ヘブーン、サンディエゴ、ロサンゼルス、その他の都市で、警察署はBPP事務所や個人宅に武装襲撃をかけ、数名のパンサー党員が殺害され、それ以外は逮捕された。

私を含め21人のBPP党員が拘留され、2年の間裁判にかけられた後、全ての告訴が取り下げられて釈放された。我々のほとんどは、自分たちのコミュニティそしてBPPに戻る事ができたが、その頃には、FBIが多用した「反諜報プログラム（COINTELPRO=コインテル

プロ）」が、我々に多大なダメージを与えるようになっていた。そのためBPPの内外に軋轢が蔓延した。内部闘争、分裂、陰謀、妄執が深刻化したため、結局ほとんどの党員がそれらに押し流され、追いやられてしまった。ある者は別の前線で闘争を続け、ある者は根本的に全くやる気をなくしてしまった。それから数年のうちにBPPは活気を失い、自然消滅するが如く終わってしまった。歴史上、黒人解放運動におけるBPPの最終的位置づけがなされるだろう。アメリカのアフリカ人は、血を流して得たつらい教訓から学ぶために、BPPの歴史の良い面も悪い面も研究する必要がある。特に我々は、BPPが、なぜ瞬く間に頭角を現したのか、なぜ多くのアフリカンや他の民族を動かすことができたのか、そして、なぜアメリカの歴史にわずかに留まっただけで消えていったのかを、学ぶ必要がある。必要なことの多くを、わずかな紙面のわずかな文章では伝え切れないので、ここでは、BPPが黒人解放運動に貢献した是非両面にわたる様々な事柄から、いくつかを指摘するにとどめよう。

BPPのもたらした積極面

1) 自己防衛：自己防衛とはBPPが黒人解放運動に貢献した根本的なもののひとつである。それはまた、最も初期の黒人組織と違い、党員（特に若者）、大衆の支援、多くの支持者を魅きつけたのである。その概念は理論的に正しいだけでなく、常識でもある。しかし、自己防衛は正しく遂行されるべきであり、さもなくば、有益というより有害となりかねない。BPPの自己防衛のポリシーは、こうした見地に立って、今日の黒人組織によ



《本号の内容》

★ブラック・パンサー党略史—黒人解放運動における位置づけ—スンディアタ・アコリ著★メキシコ政府の一方的停戦破棄（2月9日）から和平対話の再開に至る経過リポート—サパティスタの声明を多数紹介★ニュース・ブリーフス／世界各地で爆発闘争～ゲリラ関連の動き

って分析される必要がある。この政府が、アフリカ人民の解放を求めるいかなる団体にも、その警察力、軍事力を行使して来るだろう事は、歴史から見て明らかだ。自己防衛に無知な黒人「解放」組織もが、命がけで自衛することとなるのである。

2) 革命的民族主義者のイデオロギー：BPPは民族主義者組織であった。その最終目的はアメリカにおけるアフリカンの解放であり、構成員は黒人に限られた。それはまた、革命的な事であった。BPPの理論と実践は社会主義者の原理に基づいたものだった。BPPは、反資本主義者であり、アメリカ社会で社会主義を目指して闘っていたのである。

国内レベルにおいて、BPPはアフリカ人大衆に社会主義の基本プログラムを広めた。国際的には、アフリカ大陸、そしてアフリカの暫定独立国、第三世界、社会主義国、さらにこれらの国に連帯するすべての解放運動との関係をアメリカのアフリカンにより広く理解させた。全体的には、アフリカンはイデオロギーによって、よりはっきりと世界を見つめ、分析するようになった。今までは、我々を白人社会に受け入れられるようにする事、我々も人間であると白人に示す事、白人と対等であると示す事、白人が抱く民族主義概念の間違いを証明する事、白人との統合もしくは対等の位置を求めて闘う事、「敵を愛する」、「敵を憎む」、「彼らは皆、悪だ」といった理論、神秘主義、世界がいかに動いているかという他の曖昧なイメージを求めて闘う事、そうした事に基づいて、多くの黒人は、世界や我々が生活している社会を分析していたのである。

3) 大衆組織の方法：党員を引きつけ、BPPへの大衆の支援を得た根本的な事のひとつは、「人民への奉仕」という方針であった。これは、人民の元へ行き、共に暮らし、苦しみを分かち合い、彼らに大いに関わりのある日常問題を解決すべく、大衆を組織するという方針であった。

大衆の望みを遂行することで、子供たちに無料で朝食を与える事から、無料の診療所、ビルの所有権につながる家賃ストライキ、小学生のための自由学校、衣料の無料配布、コミュニティによる学校、警察組織の管理を目指す運動、アメリカの様々な黒人社会における、ドラッグ、犯罪、警察による殺人や悪行の撲滅運動まで、BPPは、コミュニティのプログラムを組織した。

これらの、そしてその他の理由から、BPPの影響は実際の党員以外にも広がった。BPPが自立を教えたばかりでなく、数年後には、学校給食の無料化、医療保障や託児施設の拡充、貧しい家の借用引き継ぎ手続きの自由化といった同様のプログラムを政府が実施したのである。ある程度、最初は、以前のBPPの同様なプログラムの記憶や自立の原理を消し去るためではなかったかも知れないが…。

4) 女性平等の実践：もうひとつの評価すべき貢献は、



組織全体を通じて、そして社会そのものにおいて女性の平等の擁護と実践をしたことである。これは、ほとんどの黒人民族組織が、女性は家庭に居り、男性の一步後に行くよう求めていたのと同じ頃に、そして、アメリカで女性解放問題が大きな論議を呼んでいたのと時を同じくして起きたのであった。

5) 宣伝技術：BPPは宣伝技術に重大な貢献をした。『ブラックパンサー』紙、大衆集会、演説旅行、スローガン、ポスター、ビラ、漫画、バッジ、シンボル（握りこぶし）、落書き、政治裁判、葬式さえも利用して、メッセージや見解を広めるのが非常にうまくいった。またBPPは、体制側のメディア、テレビ、ラジオ、印刷物をうまく利用することでもその思想を広めていった。

他にもあるが、BPPの宣伝技術の有効性を示す注目すべきものの一つは、10年以上経った今日でさえ、テレビ番組の大部分を占めているのが今だに「ポリス・ストーリー」で、黒人俳優が演じる役の多くは、警察官に限定されているという事である。これらの大半は、警察の荒廃したイメージを回復し、この社会における警察の役割が再び暴かれるのを阻もうとする全過程に関わっているのである。

BPPのもたらした消極面

1) リーダーシップの崩壊：結局、コインテルプロはBPPの最高リーダーである3人（ヒューイ・P・ニュートン、ボビー・シール、そしてエルドリッジ・クリーバー）全てを脅かし、墮落させた。それぞれが圧力に屈し、そして、BPPを崩壊させ、党員のみならずアメリカのアフリカンをも、その後何年にもわたって幻滅させるよう注意深く計画された流儀で活動し始めたのである。アメリカのアフリカンが、あまりに幻滅が大きくて、黒人弾圧を真に解決することを主張するいかなるアフリカンの指導者や組織をも、二度と決して信用せず、従わないようになる、というのがコインテルプロの望みだった。

2) 通常活動と地下活動のかかわり：これはBPPの最も重要な構造的欠点である。日中はBPP事務所公然と働いたり、コミュニティで公然と組織された党員が、

夜間に武装行動をしていた者と、おそらくは同じ人間だったろう。このことは、BPP事務所や党員宅への一斉手入りに都合の良い口実を警察に与えることとなった。容疑者、逃亡者、武器、爆弾の製造を口実にしてである。BPPは、自らの事務所を恒常的な防衛の場とせざるを得なくなってしまった。通常活動と地下武装組織とは、明確に分けるべきだったのだ。また、一般的戦術として、小軍隊は事務所、自宅、ビルなどを恒常的な防衛の場とすべきではない。

3) 能力以上の大げさな言葉：BPPは宣伝技術にたけており、自分たち及び体制側のメディアを非常にうまく利用していたが、多くの党員は、公的メディアで騒々しく主張したり、後始末のできない「ウルフ・チケット」(訳註1)を売ったりする癖がついていた。実際、彼らは結局のところ、本気で受けとめられてはいなかったのである。報道機関は〜いくつかは警察の手先だったが〜しばしば、党員の鼻先にマイクを突きつけて、大げさな言葉をべらべら喋らせようとするだけだった。これは、ありそうな情報を警察に吹聴したり提供するために、中傷材料を単に求めているに過ぎない者の利益となるような行動であった。

4) ルンペン的な性癖：ニューヨーク(おそらく全国的に)のBPP党員たちの大部分が日雇いの労働者であったと言って差支えないだろう。それ以外は半労働者、学生、仕事を持っていない若者、ルンペン・プロレタリアートである。何人かの党員の中にあるルンペン的な性癖は、体制側のメディア、そして何人かの党員が最も強調した事だった。ルンペン的な性癖は、規律の欠如、多量の飲酒、マリファナ、汚い言葉、だらしない性道德、犯罪的傾向、無分別な行動などと関わっている。何人かの党員の中にあるこうした性癖は、この側面を強調して党を中傷するという以外にも、もっと良い機会をメディアに与えたのである。BPPが作り上げてきた多くの評価すべきことから、民衆の注意を引き離すことになってしまったのであった。

5) 教条主義：当初の成功は、党員たちに時として彼らのみが絶対的真理なるものの所有者だと思わせた。ある者は、党員、他の組織、コミュニティにさえ傲慢かつ教条的な態度をとるようになった。そのために人民は、そっぽを向いてしまったのだ。

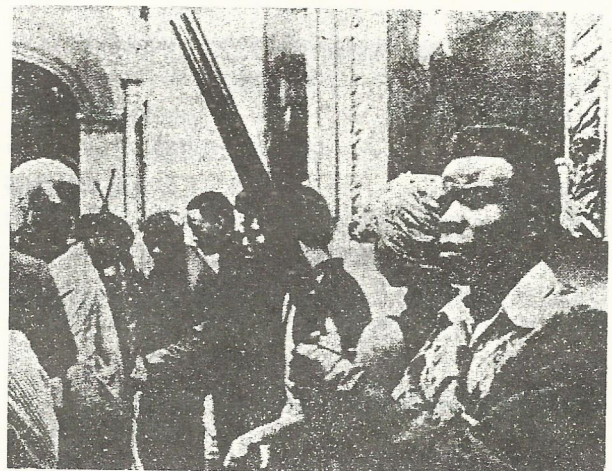
6) コミュニティーの財政基盤の組織化の失敗：BPPは社会主義政策を採用することを説いていた。彼らは、反資本主義者であり、このことが、コミュニティにおける経済基盤の確立という概念を貫いていた。彼らは、どんな事業に関わることも、資本主義に関わる事だと思っているくらいがあり、コミュニティでのちょっとした事業に関わっている人を軽蔑の目で見ることが多かった。BPPは、黒人コミュニティの経済に対する外部からの制御を打破し、経済的自立へ向かうのに役立つような、

独立した経済基盤を確立する手段として、黒人コミュニティが自らのビジネスを始めるよう助成するのに失敗したのである。

7) テレビに内在する性格：60年代は、大きな転換期であった。アメリカの主要な階層は、大衆闘争に関わっていた。黒人解放、アメリカ先住民、プエルトリコ、アジア、メキシコ系アメリカ人問題、反戦、白人の革命運動、そして女性解放運動等は、多少前後するもののその時代に全て起こっていたことだ。このかなり大きな転換期にあって、党員は、国家権力の奪取が差し迫っており、革命闘争はペースの早いテレビ番組の様だと、否応なく考えるようになったようだ。すなわち、まるで9時にある事が起こり、その後45分間の内にさらに強力なものになって、その5分後には勝利し、そしてすべてが10時のニュースには間に合っているというわけだ。しかし数年がたち、そういったことは起こらなくなった。つまりアメリカ黒人は自由を持たないままであり、いかなる革命も起こらず、さらに悪い事には、BPPは守りの態勢に入ってしまう、徐々に勢力を失い、内部に不和が広がっていった。そして多くの党員は士気阻喪し、幻滅感をもち、党を離れて行くか、昔の生活に戻って行ってしまった。彼らは精神的に、長い闘争に対する備えがなかったのだ。後で考えてみると、BPPは、何人かの党員の中にあるテレビ的思考方を根絶やしにするには力不足だったが、他では十分にやっていたと思える。これは、考慮すべきである。

BPPは重大な過ちを犯したのではあるが、同時に計りしれないほどの成功をもつかみ、黒人解放闘争に重大な貢献をした。BPPが、独自のやり方で真の自由を達成するのに必要な、黒人のための協議事項(ブラック・アジェンダ)に、最終的な材料すなわち武装闘争を加えたことは、歴史の最終的判断を見るまでもない。しかもこれが、最終的に黒人解放運動を勝利へと導く大転換だったのである。

※訳註1/コンサートやイベントなどで実際にはない、又は収容数を越えた席に対して売られるチケット。



我々の声は語り継がれるだろう EZLN声明より たくさんの人々、たくさんの道を通じて 山から、全メキシコの兄弟姉妹たちの心へと —政府による停戦破棄から対話の再開へ—

2月9日の朝、EZLN（サパティスタ民族解放軍）のマルコス副司令官は、解放区のグアダルーペ・テペヤックで『ホルナーダ』紙（メキシコの全国紙）のインタビューを受けていた。ちょうどインタビューの最中に、セディージョ大統領の国営テレビを通じた発表が行なわれた。

発表の趣旨は、「8日にメキシコ市とベラクルス市でEZLNの武器庫を摘発し構成員数人を逮捕した。この結果、EZLNがメキシコ市などを攻撃し、戦場をメキシコ全土へ拡大しようとしていることが明らかとなった。サパティスタに和平の意思はなく、攻撃準備の時間稼ぎをしていただけ。国民の安全と秩序を守るために、EZLN幹部22人への逮捕命令を警察と軍に出した」というものであった。これによって政府は停戦を一方的に破棄して、直ちに軍事行動を展開することとなる。

これを聞いたマルコス副司令官は、『ホルナーダ』の記者に、「政府は我々をだました。乾期には我々を攻撃することができるので、彼らは時を稼いでいたのだ。もし誰も止めなければ、ゲリラ戦争となる。我々は必ず勝利する」と語った。メキシコ当局の発表によると、マルコス副司令官の本名はラファエル・セバ스티ヤン・ギジュン（37才）。メキシコ北東部のタマウリパス州タンピコ出身で、グアダラハラ市の工科大学を卒業後、1979年1月にソチミルコ大学の助教授に採用されが、1984年5月に辞職している。大学在学中にチアパス州で社会奉仕に従事しており、この時、ラカンドン・ジャングル地域での先住民族の悲惨な生活に接して、反政府意識が目覚めたとされている。また、同じく当局はEZLNを、1969年に創設されたゲリラ組織「国民解放軍」の分派であると断定し、マルコス副司令官らは1980年代始めにサンディニスタ民族解放戦線の軍事基地で訓練を受けた後、1985年からチアパス州で活動を開始していたとも発表している。

大統領の発表を受けて、警察部隊は同日夜にメキシコ市の西に位置するトルーカ近くのEZLNの基地を急襲して、14人を逮捕し12丁の自動小銃、ショントガン、弾倉などを押収し、地下射撃訓練場と制服の縫製施設を発見したとしている。この際に、銃撃戦となり、2人の警官が死亡し、3人が負傷。一方、連邦軍はサンクリストバル・デ・ラス・カサス近郊の軍駐屯地の増強を、大統領のテレビ放送と前後して開始した。

2月10日には、チアパス州内で大規模な弾圧が開始され、30人が逮捕された。この中には、メキシコ当局がE

ZLNの幹部だと主張する3人が含まれている。サンクリストバルで逮捕されたホルヘ・サンティアゴ・サンティアゴ（50才）は、チアパスでは良く知られた地域運動の活動家であるが、EZLNの5人の最高司令官のうちの一人とされた。チアパスの州都ツクストラ・グティエレスでは、当局がEZLN副司令官ビンセントだと特定したホルヘ・ハビエル・エロレアーガが逮捕された。また、メキシコ市では、エロレアーガの妻マリア・グロリア・ベナビデスも逮捕され、当局はEZLNの文書と9mmピストル2丁を押収したとしている。他の27人の逮捕者の中には中古武器販売店の従業員も含まれていた。逮捕された人々は、メキシコ政府によるデッチ上げ弾圧を糾弾した。EZLNも、2月19日付声明で、逮捕者が無関係だと声明している。

連邦軍は、10日からEZLN解放区への本格的侵攻を開始した。グアダルーペ・テペヤックなどの町を占領した後、ジャングルに浸透する作戦であった。国防相の発表によると、動員された連邦軍兵士は2万5000人、33機の航空機と30両の戦車、32両の装甲車であるが、順次増強されている模様。同日昼には、ヘリコプターなどを使った村やジャングルへの爆撃が行なわれた。連邦軍は、解放区を包囲する布陣をとり、サン・キンテン（グアダルーペ・テペヤックの東15マイル、グアテマラ国境から20マイル北）を中心に東と北からEZLNを挟撃しようとした模様である。EZLNは、連邦軍との戦闘を回避しながらラカンドン・ジャングルの中へ撤収したため、大きな戦闘は起こらなかったが、グアダルーペ・テペヤックへ向かう連邦軍の車列が攻撃を受けて兵士1人が死亡、11日には、ヌエボ・モモンに侵攻した連邦軍がEZLNの待ち伏せ攻撃にあって2名の連邦軍兵士が負傷し、コミタンの病院へ運ばれ後に死亡した。その他負傷者も出ている。

EZLNの解放区に接するグアテマラの大統領ラミロ・デ・レオン・カルピオは、11日に国境侵犯を防ぐために軍に警戒体制を発令し、メキシコ政府の軍事攻勢への支持を明らかにした。そして12日には、セディージョ大統領の要請を受けて国境を閉鎖している。

連邦軍の攻撃が始まってから2日目の2月11日には、メキシコ市に10万人が集まり抗議行動を展開した。サパティスタ支持のスローガンを掲げて逮捕攻撃と軍事侵攻を糾弾する人々は、口々に「我々皆がマルコスだ!」と叫んだのであった。昨年の大統領選挙でPRD（民主革命党）からの候補者となり、EZLNと協調関係を維持

してきたカルデナスは、「セデージョ大統領は、多くのメキシコ人の血を流そうとしている」と非難した。抗議行動は、この日にとどまらず連日行なわれた。

チアパスの作戦展開地域では、連邦軍が嚴重な報道統制を行ない記者を締め出しているために、どの程度の虐殺が連邦軍によって行なわれているかは定かではないが、11日付のEZLN声明（本号に採録）では、多数が虐殺され、兵士によるレイプもなされていることが明らかとなっている。EZLNは12日になって、ラジオ放送で国民が抵抗に決起するよう呼びかけた。

サパティスタに連帯する行動は、アメリカ、イタリアなど世界各地でも展開され、メキシコ系企業や政府機関への抗議行動が続いた。

2月14日になってセデージョ大統領は、解放区内での進撃を中止して軍事行動をパトロール行動に限定すると発表した。当局は「サパティスタをジャングルの奥に追いやった。これ以上追跡を続ければ、衝突の危険がある」としている。モクテスマ内相は15日になって「法と秩序は回復した」として勝利を宣言。大統領は投降者に対する恩赦法案を国会に提出した。同日、EZLNは連邦軍の解放区からの撤退を条件とする対話の提案を行なった。EZLNのアナ・マリア少佐は「対話のためには、政府軍が撤退し、逮捕命令を撤回しなければならない」としている。

軍の行動をパトロールなどに限定するとの大統領命令に関わらず、政府軍はラカンドン・ジャングル一帯の町や農場への組織的襲撃を繰り返し、住民弾圧を続けた。この結果、住民の難民化が始まり多くの先住民族の人々が村を捨ててジャングルに逃れている。その数は、2月末の時点で6000人を越えるとされている。食料事情が悪く、肺炎、下痢などの病気も広がっている。人権団体の調査では、すでに15人の住民の虐殺、そして行方不明が報告されている状況であり、昨年蜂起に際して連邦軍が行なった虐殺の記憶も生々しく残っている。

この間、国民調停委員会（CONAI）が調停努力を継続し続ける一方、国会内特別委員会が「チアパスにおける平和と対話のための法」を提出した。EZLNは3月2日付声明で、この法案の問題点を指摘。国会は、E



解放区に侵攻するメキシコ政府軍

ZLN側の要求を配慮しながら、3月8日に上院でこの法案を可決し、翌日下院でも可決されて成立した。この法の骨子は、軍事行動を一時停止し、EZLN幹部への逮捕命令を1ヶ月間猶予して、和平交渉の再開を促すものであった。

EZLNは、3月11日付声明で、この法の成立に至る努力に敬意を表し、政府代表との書簡を通じた対話の再開に着手することを明らかにした。書簡対話は、直接対話の実現に向けた条件を創り出すことを目的としており、両者間の交渉が続いた。

今回のメキシコ政府の軍事攻勢は、チアパスでの二重権力状態を終わらせて、民衆の抵抗運動の拡大を押さえ込むことを目的としていると考えられるだろう。不正選挙で知事となったPRI（制度的革命党／政権党）のロブレドに対して、民衆はPRDのアベンダーノを正当な知事として擁立し、民衆の抵抗闘争は実力闘争を含んで激化している。また、EZLNの解放区は、ジャングルだけではなく多くの町や村をも含んで、地域的な実効支配を確立している。そうした二重権力状態が存在している事実は、民衆にとっては力となり、政府にとっては大きな負の要因である。チアパスの闘いは、メキシコ政府がその独裁と資本主義政策に起因する政治的、経済的危機を乗り越えることを困難とする大きな要因になっていると言えよう。

民主主義の実現に向けた闘いが進展する一方、与党PRIの政治的腐敗は更に深まっている。2月下旬には、昨年の大統領選挙に際してのPRI候補であるコロシオが暗殺された事件で2人の共犯が逮捕され、さらに28日には、前大統領の実兄であるラウル・サリナスがPRI幹事長暗殺の容疑で逮捕されるに至っている。これにより、2人の暗殺がPRI内部の権力闘争の結果であったことは、より明確化しつつあると言えよう。この権力闘争は、前大統領のアメリカ亡命（3月13日）にまで行き着いたのであった。

4月10日には、オコシゴのサン・ミゲル教会において、EZLNと政府代表との直接交渉が行なわれた。EZLN代表団は7人の司令官で、マスクはしているが武器を持たず、平服での参加であった。マルコス副司令官は出席していない。会談には、CONAIからルイス司教、COMPOCA（調和と和解委員会／各党の国会議員からなる特別委員会）の代表も出席した。12時間に及ぶ交渉で、EZLN指導部への逮捕命令凍結の延長が決められ、10日未明には、チアパス州内で和平対話を20日から開始することで合意した。

和平対話が行なわれる予定の20日、先住民族数千人がEZLN代表団の身の安全を守るために、対話が行なわれるラインサル村を占拠した。このため、政府側は出席を拒み延期されることとなる。EZLNの説得を受けた人々が22日未明に占拠を解除したため、2日遅れで和平対話が持たれた。両者の代表団は各4人ずつ、CONAIと国会議員による委員会も出席した。政府側の担当大臣モクテスマ内相、EZLNのマルコス副司令官は出席しなかった。

なお、前号でE Z L Nのラモーナ司令官が死亡したとの報道を紹介したが、これは誤りであった。実際に重病にはかかっているが、チアパス州にいる模様であり、現在、彼女の治療をメキシコ市もしくは外国の設備の整った病院で行なうことができるよう、政府に対して要求する運動が展開されている。呼びかけているのは、国民民主大会（CND）と女性国民大会（CNM）である。

（編集部）

サパティスタ民族解放軍総司令部
先住民民族革命地下委員会
（CCRI-CG/EZLN）声明
メキシコ チアパス 1995年2月11日

メキシコ人民へ 内外の報道機関へ 世界の人民へ

我々は、メキシコの全ての兄弟姉妹たちに、悪しき政府が我々に対し進めている虐殺戦争を引き止めるよう呼びかける。

連邦政府は、虚言をもって行動している。我々の村において、汚い戦争を遂行しているのだ。昨日の昼過ぎ、14機のヘリコプターがモレリアとガムーチャ周辺を爆撃したのに加え、サパティスタ解放区を砲撃し、数千名の連邦軍兵士が、モンテ・リバーノ、アグア・アスル、サンタ・ルシア、ラ・ガムーチャ・チャムペス、サン・アグスティン、グアダルルーペ・テペヤックその他を通して、ジャングルの中に侵攻した。連邦軍は、死と邪悪をもって、我々を包囲している。我々サパティスタの兵士と市民は、現時点に至るまでに、退却すべくあらゆる手段を講じて来た。しかし今、我々自身を守り、村を守り、家を離れた数千の市民を守る他は、いかなる選択もしはしない。

兄弟、姉妹たち、エルネスト・セディージョの政府は、我々を殺している、子どもたちを殺している。女性たちを襲いレイプしているのだ。

我々は、メキシコ人民と世界の全ての人民が、この戦争を止めるために行動するよう求める。

繰り返し求める！兄弟姉妹たち！我々を孤立させないでほしい。

我々は、尊厳をもって行動する。

民主主義！自由！正義！
友愛をもって

メキシコ南東の山なみから
CCRI-CG/EZLN メキシコ 1995年2月

CCRI-CG/EZLN声明
メキシコ 1995年2月12日

メキシコ人民へ 世界の人民と諸政府へ
内外の報道機関へ

CCRI-CG/EZLNは、以下声明する。

(1)

2月9日の朝、連邦軍兵士を乗せた数百台の装甲車、輸送車が、EZLN管理下にあるサン・ペドロ・デ・ミチョアカン行政区の首都グアダルルーペ・テペヤックに向けて進撃した。低空飛行し、国民民主大会（CND）本部のあるアグアス・カリエンテスに着地した武装ヘリコプターが、進撃を援護した。連邦軍兵士は、全ての一般住民と国際赤十字をその地から移動あるいは追放すべく、過度な暴力をもってグアダルルーペ・テペヤックに侵入したのである。2月10日と11日、30機のヘリコプターの低空飛行は、夜を日について甚だしく増大した。これは全面戦争の危険を作り出すものである。数百台の戦車と軍用車両が、ガルルーチャ、カンパ・サン・アグスティン、サンタ・ルシア、モンテ・リバーノ、テネペルラス、ラ・ウニオン、その他の街に導入され、誰も出入り出来ないように完全封鎖した。2月11日、ヘリコプター2機がアルタミラノとラ・ガルルーチャ付近に5発の爆弾を投下し、更にEZLN解放区の数カ所の町に、機銃掃射を行っている。

連邦軍兵士は警察官と共に一般市民を拘禁し、拷問している。同じ日の午後、オコシンゴ行政区のロザリオ・イベラの町では、町の人々が居場所を突き止められて拘禁され、女性と子どもを含む全員が拷問を受けた。地域当局代表者の一人は残酷な拷問を受け、腕を切り落とされた。口を割らせて所属組織についての情報を提供させるために、女性たちは、子どもを殺すと脅された。セディージョを頭目とする連邦政府がEZLNに対して遂行している蛮行と汚い殺戮戦争を、CCRIは人間的悲しみをもって糾弾する。

この声明が書かれている今現在までに、EZLN兵士は市民と共に、可能な限り連邦軍兵士との戦闘を避けて後退している。しかし、政府には圧迫を弱めて対話をするようとする徴候はない。セディージョの言葉は虚偽である。サパティスタ地域で強いている汚い戦争を正当化するための、全くの口実なのだ。CCRIは、サパティスタだとされた拘留者たちを知らないことを明らかにする。我々は、他の組織もしくは勢力を知らない。我々の有する唯一の組織は、EZLNである。我々は反乱者副司令官マルコスを知っている。彼は、11年前にラカンドン・ジャングルで生まれた。以来彼は、チアパスの先住民民族である我々と寝食を共にしている。CCRIの全メンバーと同様、マルコスは何も知らず、それ以外の何者でもない。CCRIと同様にマルコスは、先住民民族と底辺の人々の代表の一人にすぎないのだ。

(2)

CCRIは、EZLNの最高機関である。他には、指導部も軍隊もない。拘留された人間などいない。1994年12月19日以来、他の地域への我が兵士の軍事侵攻は行っていないことを、我々は明らかにする。



(3)

CCRIは、対話に臨む姿勢があることを繰り返す。しかし、連邦政府が、EZLN解放区から兵士を移動するとの条件付きである。我々は、世界の人民、メキシコ人民、そしてセデージョ政府に告げたい。我々は降伏するつもりはないし、山中で抵抗する。もしセデージョ政府が望むのならば、戦争となるだろう。しかし、もし彼が対話を望んで対話の気持ちを持つならば、EZLNは対話を望み、問題への政治的道が開けることを求める。

(4)

これが状況である。セデージョ政府は、チアパスとメキシコに存在する窮乏と最底辺の問題を解決する能力がないことを再び示してしまっている。絶滅戦争によって、あなたたちは虚偽に立ち戻り、軍の最高司令官として、国家の長としての尊敬に欠けることを、再度見せているのだ。そして、我々は再度、あなたに告げよう。我々は降伏しないし抵抗するだろう。

民主主義！自由！正義！

メキシコ南東の山なみから

CCRI-CG/EZLN 反乱副司令官マルコス
メキシコ 1995年2月

署名：アナ・マリア少佐、ダビド司令官、
ハビエル司令官

CCRI-CG/EZLN声明

メキシコ 1995年2月17日

メキシコ人民へ 世界の人民と諸政府へ
内外の報道機関へ

兄弟、姉妹たち。CCRI-CG/EZLNは、以下
宣言する。

(1)

連邦軍は、ラカンドン・ジャングルの中を進軍し続けている。その進路で、連邦軍は多数の放棄された村に出合っている。一般市民たちが、兵士たちの専横な行動の犠牲となるよりは、山に逃れるのを選んだからである。

地域社会において、連邦軍は、破壊、強奪、盗み、略奪に専心している。不幸にして彼らの手に落ちた人々は、拷問と尋問の犠牲者となっている。加えて、不当逮捕され、行方不明となったり、暗殺された者もいる。

(2)

紛争の政治的解決を求めるEZLNの姿勢表明に対して、連邦政府は2つの顔をもって応じた。平和と対話を語る一方で、流血の軍事攻撃を準備したのである。準備を完了した時、政府は対話を破棄し、ラカンドン・ジャングルでの軍事攻勢をかけたのだ。

政府は紛争の解決を望んではいない。我々を壊滅させることを望んでいるのだ。我々を買収しようとして果たせず。今、我々を打ち破ろうとして、再び失敗している。

(3)

こうして、裏切られ傷ついたにも関わらず、CCRI-CG/EZLNは兵士たちに対し、山中に位置を後退させ、可能な限り最高政府の制裁遠征隊との武力衝突を回避するよう命令した。かくして、EZLNは対話への意志を確認し、国内外の市民社会が、サパティスタの現実かつ真実の政治的意志の表明を見極めることが出来るよう導いたのである。

(4)

本日、ラジオ放送を通じて、我々は立法委員会による呼びかけを知った。この委員会は、対話の再開のための提案を作成する目的をもって、様々な政党のメンバーによって構成されている。

EZLNは、これに応える。／対話の物理的条件は存在していない。EZLNと共にあるサパティスタ地域社会は、山中に避難場所を見出した。例え、どの様なものが、サパティスタ地域の中で対話に関する意志疎通と合意形成に努力しても、政府の侵略に直面して対話を遂行することは不可能である。

対話を再開するにあたって、絶対に欠くことの出来ない必須条件はラカンドン・ジャングルにいる連邦軍の撤退である。1995年2月8日の位置まで戻ることである。

(5)

EZLNは、2つの顔を演じてはいない。その対話の意志は、常にそうであったのだが、ひたむきなものである。そして、この政治姿勢の根拠は、あまたある。

今日、我々はメキシコ人民に対して、チアパスの平和と和解のための対話の呼びかけの中で1994年2月21日以来声明されてきたもの、チアパス州サン・クリストバル・デ・ラス・カサスで行なわれたことを確認する。もし、それが尊厳と誠実を備えたものならば、我々は喜んで平和的解決を求め続ける。

(6)

今日、何度も繰り返して来た我々の対話への意向の宣言にも関わらず、連邦軍は我々を窮地に追い込み続けている。彼らは、死か戦いかを選択させる行き止まりの路

地の中に、我々を追い立てているのだ。強いられるのなら、我々は戦うだろう。もし、他の如何なる選択も残されないなら、我々はゲリラ戦争を開始する。もし、提案される対話が尊厳と真実あるものならば、我々は語るだろう。

兄弟姉妹たち。我々は、最高政府からの侮辱と死に関する嘘を予期するのみである。

国内外の市民社会から、尊厳を持って語り、生きる機会が与えられることを我々は期待する。尊厳をもって生きるのか、死ぬのかは、なおもサパティスタにとっての唯一の選択である。

メキシコそして国際社会の人々は発言権を有する。－我々は耳を傾けている。

民主主義！自由！正義！

メキシコ南東の山なみから

CCRI-CG/EZLN 反乱副司令官マルコス

1995年2月 メキシコ

署名：アナ・マリア少佐、ダビド司令官

ハビエル司令官

CCRI-CG/EZLN声明

メキシコ 1995年2月19日

メキシコ人民へ 世界の人民と諸政府へ
内外の報道機関へ

兄弟姉妹たち。

EZLNに対し、一部のマスメディアによって助長されている、現在のデマ・キャンペーンに応じて言う。

(1)

サムエル・ルイス・ガルシア司教とチアパス州サン・クリストバル・デ・ラス・カサス司教区の各々のメンバーは、我々EZLNと結び付いており、加えて、1994年



政府軍侵攻直前のグアダルーペ・テペヤック

1月の我々の蜂起を前もって知らされていたと非難されている。これは全て嘘である。サン・クリストバル司教区の教会組織は、今も昔も我が軍といかなる関係も持っていない。1994年2月の以前には、EZLN指導部とサムエル・ルイス司教との間にはいかなる接触もない。サムエル・ルイス・ガルシアが紛争での調停者の役割を引き受けるまでは、なかったのである。接触は、CCRI-CG/EZLNとルイス・ガルシアとの間での手紙によって始められた。最初の直接的接触は、1994年2月にチアパス州サン・クリストバル教会で和平交渉が始まった時に持たれたのである。我々は、サン・クリストバル司教区の教会組織のみならず、他者からのいかなる種類の援助も受け取っておらず、計画もしくは意図を伝えたことはないことを繰り返しておく。EZLNの行動は、CCRI-CG/EZLNにのみ責任がある。

(2)

我が組織の指導部に属し、サムエル・ルイス・ガルシア司教とEZLNの間の連携作業を行なったとして告発されたホルヘ・サンティアゴ・サンティアゴという名前の人物に関しては、CCRI-CG/EZLNは彼を知らないことを宣言する。彼は、EZLN指導部だけでなく、そのいかなる部門にも属していない。彼も他のどんな人物も、EZLNとルイス・ガルシア司教と連携した活動を行なってもいなかったし、行なっているという事もない。

(3)

加えて、拘留されている者にも、EZLN指導部に所属しているとして告発され、逮捕命令を出されている者にも、我が組織の最高司令部であるCCRI-CG/EZLNのメンバーはいない。

(4)

サムエル・ルイス・ガルシア司教に対する攻撃と中傷は、ルイス司教が議長を務めるCONAIを圧迫せんとする政府の計画に従ったものである。これは、いかなる邪魔もなしにEZLNを絶滅させ、大農場主と企業家が、自由にチアパスの先住民族社会に対する抑圧を続けられるようにするためのものである。

(5)

紛争の平和的解決を探るにあたって、EZLNと連邦政府間の唯一の調停媒体としてCONAIを承認していることをCCRI-CG/EZLNは確認し、そのメンバーには、道徳的権威、中立性、チアパスとメキシコのための正義と尊厳ある平和への真の関心があると認識する。

(6)

CCRI-CG/EZLNは、正しい仕事に対する中傷と嘘によって脅かされるのを許さず、チアパスの先住民族に対してメキシコ政府が戦争状態をエスカレートさせるのを引き止めるよう、一層努力することをCONAIに勧告する。

(7)

困難な軍事情勢を鑑みて、CCRI-CG/EZLNは自らの言葉を知らしめる種々の手段と方法を捜すこと

を強いられている。こうした手段によって、CCRIG/EZLNが発し、司令官ダビド、司令官ハビエル、アナ・マリア少佐の署名した様々な声明を、CCRIG/EZLNが確認し尊重することを、メキシコ人民、世界の人民と諸政府、CONAI、国内外の報道機関に伝える。それらの同志たちが署名した全ての声明、述べた事全てを、サパティスタ民族解放軍の最高司令部であるCCRIG/EZLNは尊重する。彼らの言葉は、我々の言葉である。

民主主義！自由！正義！

メキシコ南東の山なみから

CCRIG/EZLN メキシコ 1995年2月

CCRIG/EZLN声明

メキシコ 1995年2月20日

メキシコ人民へ 世界の人民と諸政府へ
内外の報道機関へ

兄弟姉妹たち。

CCRIG/EZLNは、以下宣言する。

(1)

我々の対話への気持ちを再確認する1995年2月17日付声明に対して、最高政府はラカンドン・ジャングルへの侵入を増大させ、戦略的・戦術的に軍事包囲を狭め、専横な拘留と一般市民の殺害を続けることをもって応えた。

(2)

本日、1995年2月20日、連邦軍兵士たちは、コラルチェンの丘にあるラ・グランデサ集団農場の一般市民に迫り、男女・子供に無差別発砲して一人を殺害、多くの男性を拘禁している。卑怯な殺人の非合法性を隠さんとする悪しき政府は、市民側からの攻撃による事態であるかのように思わせようとした。彼らは嘘をついている。EZLNへの民衆の支援を排除する目的をもって、政府の軍隊は、我々の大義に心を寄せる地域社会に危害を加えているのだ。

(3)

最高政府は、サパティスタの対話への意向を弱さの印と判断している。彼らは間違っている。セディージョの軍隊によって余りにも怒りをかき立てられ続けるのなら、EZLNの軍隊は、何時でも動く準備が出来ている。

(4)

CCRIG/EZLNは、エルネスト・セデージョに、対話を通じた紛争の解決をきっぱりと決心し、この気持ちの明解かつ具体的な印を示すよう勧告する。さもなくば、彼は国民に向き合い、全てのメキシコ人ならびに国際社会に、彼が市民の殺害とEZLNの軍事的壊滅を選択したことを納得させるようすべきである。

(5)

かくして再度EZLNは、尊厳と正義をもって政治的に紛争を解決するという意志を確認する。

民主主義！自由！正義！

メキシコ南東の山なみから

CCRIG/EZLN メキシコ 1995年2月

CCRIG/EZLN声明

メキシコ 1995年2月20日

国民調停委員会 (CONAI) へ

サムエル・ルイス司教に敬意をはらって

兄弟姉妹たち

対話の再開を求めるあなたたちの最終提案に関して、我々は以下の通り述べる。

(1)

悪しき政府の軍事攻勢がもたらした通信の困難さのため、我々は、あなたたちが我々になした提案を完全に知ることを妨げられている。しかしながら、我々は提案の骨子を承知している。それらの主要項目に関しては、我々自身が申し込むつもりである。

(2)

考慮すべき重要事項が2点ある。第1点は、対話を破棄して軍事攻勢と我々の指導者たちの迫害を行なったのは、EZLNではなく、政府だったという事である。第2点は、サパティスタ区域での強力な軍事力の存在とEZLN指導部に対する逮捕命令が、書簡によるものも含めて、いかなる対話をも事実上不可能にしていることである。

(3)

さしあたって、係争中の諸党間での会談のために、物理的かつ法的条件が作り出されるなら、対話再開の第一歩だけは可能となるだろう。連邦軍のラカンドン・ジャングルからの撤退と法務大臣の我々に対する逮捕命令取消し、という物理的かつ法的条件なくしては、対話の期日を設定し、計画の中で提案されている不変の停戦に最終的に署名することは時期尚早である。

(4)

EZLNは、屈辱的条件の下での対話を望まない。対話を破棄した側が、その再建のための条件を創り出す義務を負っているのである。

(5)

唯一あなたがたが、EZLNと連邦政府間の調停に対して努力していることを、我々は再確認する。そして我々は、あなたたちが和平努力を守り続けるよう勧める。

民主主義！自由！正義！

メキシコ南東の山なみから

CCRI-CG/EZLN 声明
メキシコ 1995年2月23日

メキシコ人民へ 世界の人民と諸政府へ
内外の報道機関へ

兄弟姉妹たち

最終的な出来事が起こったので、CCRI-CG/EZLNは以下のように宣言する。

(1)

想像されるエルネスト・セデージョ・ボンセ・デ・レオンの対話の意図は欺瞞的に思える。彼が政治的かつ合法的解決を語る一方で、軍隊はラカンドン・ジャングルを進撃し、一般市民を恐怖に陥れ、人民を不法に拘留し、略奪と破壊を続けているのだ。

(2)

連邦軍は、もっぱら組織的に、先住民族の貧しい家から略奪し、協同組合店から強奪し、農場を破壊し、食料に毒を盛り、共同体の家畜を略奪している。この全ての証拠は、人民の間で、ラ・ガルーチャ、エル・プラド、サン・ファン、スルタナ、ヌエバ・エステージャ、ラス・タツァス、ラ・ウニオン、ラ・グランデツァ、イバラ、ラグナ・サンタ・エレナ、グアダルーペ・テペヤック、ビセンテ・ゲレロ、ヌエボ・モモン、それに、その他多くの共同農場で、ラカンドン・ジャングルの全ての共同体で集めることができる。彼らの家は破壊され、店は略奪され、穀物は化学薬品で汚染され、コーヒー園とトウモロコシ畑は激しく砲撃され、連邦軍のトラックというトラックは家畜を満載しているのだ。これ全て、連邦軍のおそらくは「社会事業」の中で、「社会平和」のための警戒の中で、ラカンドン・ジャングルに暮らす我々の今日なのである。

(3)

彼の現在の解決とは、役に立たない声明であり、時を稼ぐことである。セデージョは、サパティスタと戦争を引き止めるために動員されている一般市民が疲弊する



大農場を占拠する人々 1994年12月

と思っているのである。セデージョは、経済危機を救ってもらうべく、外国資本を喜ばせようとしているのだ。

(4)

EZLNは、メキシコ先住民族のための正義と尊厳ある平和に至る動員を止めないよう、内外の市民社会への呼びかけを行なっている。

民主主義！自由！正義！

メキシコ南東の山なみから

CCRI-CG/EZLN 反乱副司令官マルコス
1995年2月

署名：アナ・マリア少佐、ダビド司令官
ハビエル司令官、フェリペ司令官

CCRI-CG/EZLN 声明
メキシコ 1995年2月24日

国民調停委員会 (CONAI) へ

兄弟姉妹たち

いくつかの項目について、我々の見解を伝えるために記す。

(1)

最近、連邦政府部内に顕著な混乱がある。連邦の各種機関のいくつかの委員会とグループが、紛争の出口として可能な解決に向けて、声明、提案、働きかけを行なっている。大統領が、EZLNとの対話と、我々の要求への正義と尊厳ある解決の道における代表として、内務大臣を任命したことを、我々は知るに至っている。それにも関わらず、今、政府の他の機関は、法務大臣のように、混乱しているようだ。法務大臣はEZLNに対し、逮捕令状の交付という刑事処分に着手した。そして大統領は、攻勢をかけ、憲法には規定されていない警察機能を引き受けるよう連邦軍に命令したのである。時を稼ぎ、警察と軍の行動を準備するために、内務大臣は対話の姿勢を装っていたのではないかと、我々は問いただした。それら戦争準備を無視した内務大臣は、大統領を真に代表してはいなかったのである。我々は、これは明白な事だと考えている。我々は、政府の一部が我々を迫害し攻撃しているのに、別の一部と対話することはできない。我々は問う。誰が連邦政府の司令官の立場にあるのか？我々にとって、それを知ることは重要である。何故なら、我々は、対話と紛争の最終的解決のための準備を整えているし、この意志は、紛争において双方の最高の代表者が互いに語り合うことでのみ可能となるからである。

(2)

我々は、紛争の政治的解決に向けた対話において、どの政府機関が彼を代表しているのか見出すべく、あなた方に調停者としてエルネスト・セデージョ・ボンセ・デ・レオンと接触するよう求める。いったい何時、我々

は彼と話し合っているのか、政府もしくは政府の一部、もしくは政府の一傾向、もしくは政府内の有力グループと話し合っているのかを探し当てるために、あなたたちに、内務大臣の長と話をしてほしいのだ。政府機構の内部抗争に、我々に関心を持たない。彼らはいつも、暗殺で終止符を打つ。我々が話すことになるのは誰か、大統領によって任命された代表が妥当なのかどうかを、唯一、我々は知りたい。今までE Z L Nは、内務大臣のみを紛争における政府代表として認識していた。しかし、政府の姿勢からは、内務大臣は政府を代表しないことを示すと思われる。

(3)

我々は、1995年2月8日の位置に政府軍があらかじめ撤退することによる、紛争の正義と尊厳ある政治的解決と、対話の迅速な再開への思いを繰り返す。このメッセージをエルネスト・セディージョ・ボンセ・デ・レオンに届け、彼の姿勢と、話し合いにおいて彼を代表する機関を明確にするよう、あなたたちをお願いする。

(4)

対決の危機を意味する進撃を停止するようにとの大統領命令に、政府軍が従ってはいないことを、知らせておく。彼らは、我が軍の怒りをかき立て続け、我々の正義の闘争に共鳴する一般市民を圧迫し続けている。

(5)

軍事衝突の危険は時を追って拡大している。あなた方が一層の和平努力をしてくれる事が必要である。

民主主義！自由！正義！

メキシコ南東の山なみから

CCRI-CG/EZLN メキシコ 1995年2月

CCRI-CG/EZLN声明

メキシコ 1995年2月25日

メキシコ人民へ 世界の人民と諸政府へ
内外の報道機関へ

兄弟姉妹たち

CCRI-CG/EZLNは、以下、糾弾する。

(1)

連邦軍は、チアパスのラカンドン・ジャングルでのEZLNに対する現在の攻撃において、一般市民の町の破壊をすでに開始している。

(2)

オコシンゴとして知られるフランシスコ・ゴメス市のブラド・エイドに2月23日から司令部を置く、96台におよぶ軍用車を含む数千人からなる連邦軍部隊は、本日、先住民族の人々の家財を全て破壊した後、その場所を去った。彼らは3軒の家を焼き、にわとり等の家畜を全て殺した。塩、砂糖、豆、トウモロコシ等の食料全てを廃

棄した上に、連邦軍兵士は全ての家に、爆発物とわかるようにワイヤーにプラスチックボールを取り付けたものを残した。占領軍は、町に電力を供給する水力発電装置を既に破壊し、共有地の電気設備を全て取り壊したのだ。馬と家畜の柵は引き倒され、馬は水も餌も与えられずに繋がれていた。政府軍兵士の虐待を恐れて山に逃れたブラド・エイドの住民は、わずかの家財すら無に帰してしまい、力なく様子を窺っている。民主主義、自由、正義という彼らの要求への回答として、政府軍兵士は先住民族の町を破壊するのである。

(3)

連邦軍は、アメリカとグアテマラの「教師」から学んだ演習を繰り返す。既に、同様の手口で破壊された地域社会が数力所ある。数千人の先住民族は、この上もなく惨めな境遇に置かれているのだ。

(4)

これは、悪しき政府が真に意図する所の一例である。先住民族を懲らしめ、跪いての対話をEZLNに強いる事を意図しているのだ。

(5)

我々は屈しない。我々のもの、我々の尊厳を守るために戦う。

民主主義！自由！正義！

メキシコ南東の山なみから

CCRI-CG/EZLN メキシコ 1995年2月

CCRI-CG/EZLN声明

メキシコ 1995年2月27日

メキシコ人民へ 世界の人民と諸政府へ
内外の報道機関へ

兄弟姉妹たち

CCRI-CG/EZLNは、以下言明する。

(1)

法務大臣と話好きな全国・地方の報道機関によって流布された誤った情報、すなわち、我がEZLNのメンバーが戦列を逃亡して悪しき政府の軍隊に投降しているとの見解、加えて、脱走者とされる人々は金銭の支払いを約束されていたが受け取ることはなかったとの主張、また、この類の嘘に関して、CCRI-CG/EZLNは以下を指摘する。

a) EZLNは、自由かつ任意に参加・離脱できる組織である。我が戦線の兵士として奉仕する名誉のためには、金銭にも脚本にも計算高さは存在しはしない。最高指導部すなわちCCRI-CGからシンパに至るまで、金銭もしくは脚本を受け取っているメンバーは、EZLNには居ない。我々が唯一受け取るものは、任務を全うした満足と、我々の子供たちにとって、より良き、より

公正な、より人間的な世界に向けた希望である。

b) 我が戦線を逃亡したEZLN戦闘員は居ない。我々の名簿は無欠であり、我が部隊は、EZLNの最高司令部たるCCRIGの命令を待ち、その位置に確固として留まっている。

(2)

サパティスタの脱走という嘘によって、最高政府は、メキシコ人民や世界の人民と諸政府を欺き、真実を隠そうとしているのだ。実際には、ラカンドン・ジャングルでは、政府攻勢の前線において多数の連邦軍兵士の脱走者があり、彼らは、兵器、軍需物資、装備を捨て、制服を隠して逃げたのである。脱走者たちは村で平服を求め、パレンケ、オコシンゴ、ラ・インデペンデンシア、トリニタリア、そしてグアテマラ国境に向かって逃げている。兵士たちは、兄弟、同胞と遭遇する前に、悪しき政府の戦列を放棄することを選んだのだ。

(3)

彼らをサパティスタ脱走者と思わせるために、傀儡として利用し、自らの戦線での意識の低さを隠し、悪しき政府は行動の威信を増そうとしているのである。しかし、嘘は失敗を生み出すだけである。

(4)

嘘をついても、紛争は解決しない。対話する意志を明確に表わすことでのみ、解決はもたらされるのである。

メキシコ南東の山なみから

CCRIG/EZLN メキシコ 1995年2月

CCRIG/EZLN声明

メキシコ 1995年3月2日

国民調停委員会(CONAI)へ メキシコ人民へ
世界の人民と諸政府へ 内外の報道機関へ

兄弟姉妹たち

いわゆる「チアパスにおける平和と対話のための法の発議」に関して、CCRIG/EZLNは、以下を指摘する。

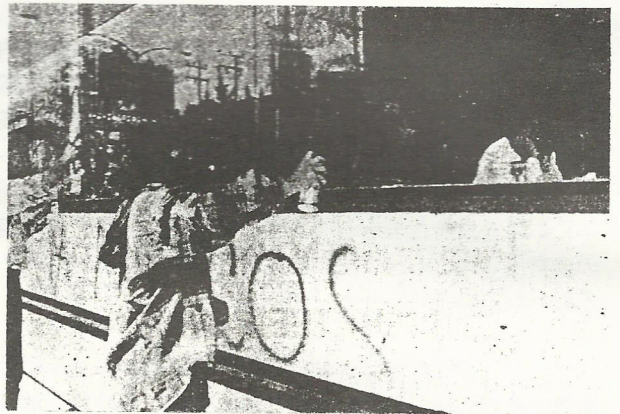
(1)

前記法律の発議は、紛争の尊厳と正義ある解決の道を真に後戻りすることを意味する。最高政府は我々を「反乱者集団」あるいは「自称EZLN」と呼び、我々の名前と大義を傷つけている。悪しき政府の政策によって不幸せな人々の集団は、全社会階級からの数百万のメキシコ人を含んでいる。

EZLNは、それら数百万の反乱者のほんの一部に過ぎないが、国家レベル、そしてとりわけ、南東メキシコの広範な先住民族集団の代表であり、真の組織なのだ。

我々は、自称「EZLN」ではない。数百万の国民、外国の人々は、我々を知っており、我々をその名前で呼ぶ。そして、いわゆる「メキシコ大統領」エルネスト・

政府軍の侵攻に対する抗議デモ メキシコ市1994年3月
スプレーでマルコスの名前を書く参加者



セディージョ・ボンセ・デ・レオン自身が、多くの場合我々をEZLNと呼んでいる。彼が候補者であった時と1995年12月1日(大統領就任)以降、我々に宛てた手紙の中でさえ、彼は我々をEZLNと呼んでいたのだ。

(2)

我々の名前と大義を傷つけることを望んで、悪しき政府は、保持されるべき言質はどんなものでも回避することを試みている。それは、我々を犯罪人として扱い続け、我々に対する政治的迫害を完結させるための罠に過ぎない。もし、政府が反乱者と話したいのなら、市民全てとの国民対話のための大テーブルを創り出すべきである。何故なら、我々は繰り返す言うが、不満と不信は、数百万メキシコ国民の宿命なのだ。もし、政府がEZLNと話し合いたいのなら、それが、全メキシコ人のための民主主義、自由、正義を要求して武器を取った先住民族を中心とするメキシコ市民の組織であることを、認識すべきである。

(3)

前記法の発議においては、何が「自由地帯」もしくは「中立地帯」で、何が対話と調停のための物理的領域なのか、混乱がある。「自由もしくは中立地帯」は、軍事衝突を回避する意図をもって、二つの軍隊を隔てるために設置されたものである。それは、紛争における中立の諸党によって形成されている。彼らは、武装集団の間に割って入ったのだ。紛争中の諸党は、この「武装集団」間の「緩衝地帯」の特質について、合意に達している。他方では、対話と調停のための物理的場所、討論の議題、協定が進展するための、そして彼らが支持され続けているという証明のための諸手続きは、係争する党の代表、すなわち内務大臣とCCRIG/EZLNの間で、「調停者」であるCONAIと共に合意に達しているものなのである。

(4)

軍隊間の接触を回避する「自由もしくは中立地帯」を除去することで、政府は、紛争を解決することで作られる前進を消去し、加えて、軍隊による先住民族の村の非人間的占領を正当化しようとしている。

(5)

立法権力は、紛争を調停することは出来ない。何故な

ら、それは紛争2党の一方に属するからである。立法委員会から4人、政府から2人、EZLNから2人の代表による委員会の設立提案において、連邦政府は、実際には6人の政府代表とEZLNからの2人の代表だという真実を隠そうとしている。これは公正ではないし、間違いであり、不適切である。

(6)

1994年1月における立場を、政府は変えてしまっている。立法多党委員会と国会を、その偏狭さと権威主義の中で、共犯者に仕立てようとしている。独立と民主主義の闘いに専念する人民と諸組織が、屈辱的な、品位のない、横柄な、不正義の法を尊びたがることを、我々は思いもかけなかった。

(7)

しかしながら、CCRI-CG/EZLNは、前記法の発議の多大な貢献を認める。

恩赦法は、対話と調停の結果として生じるべきであり、討議があらかじめ必要なわけではないことは、明白である。

(8)

CCRI-CG/EZLNは、紛争の正義と尊厳ある最終的な解決に至るために必要な道を見出すため、複数立法委員会のメンバーの誠実な努力と真の関心を認める。

(9)

CCRI-CG/EZLNは、前記法の発議の内容を拒絶する。しかし、それに命を与える対話の精神に敬意を表する。我々は、対話の再開と紛争の最終的解決を可能とする諸手続きを採り続けるための責任を負うよう、勧告する。彼らを鼓舞する精神は、PRIと政府を含むメキシコの政治階級の中に反映され、そこには、現実的かつ真の趨勢が、軍事的鎮圧の道でなく、政治的解決を求めて存在するのである。

(10)

CCRI-CG/EZLNは、紛争解決のための正義と尊厳ある政治的な道を継続するという純正な意志を繰り返しておく。

民主主義！自由！正義！

メキシコ南東の山なみから

CCRI-CG/EZLN 反乱副司令官マルコス

メキシコ 1995年3月

署名：アナ・マリア少佐 ダビド司令官

ハビエル司令官 フェリペ司令官

CCRI-CG/EZLN声明

メキシコ 1995年3月11日

メキシコ人民へ 世界の人民と諸政府へ
内外の報道機関へ

兄弟姉妹たち

我々は本日、いわゆる「チアパスでの対話、和解、威厳ある平和のための法」が連邦議会で承認されたことを知った。以下は、それを検討した後の、我々の考えである。

(1)

修正にも関わらず、同法は満足のいくものではない。それは、我々の代表者との対話に不正な条件を押し付け、その警察的・軍事的計画を遂行するために、連邦軍が利用するかもしれない重大な手抜きを呈している。

(2)

しかしながら、同法は、対話の再開のための尊厳ある状態の創出を認めるとの、重要かつ価値ある要素を含んでいる。この法は、正義と尊厳ある紛争解決に向けての重要な出発点を意味している。

(3)

CCRI-CG/EZLNは、いわゆる「複数立法委員会(PLC)」が遂行した政治的和解の努力に敬意を表する。対立する立場を和解させる法則を見いだそうとする困難な仕事が、我々の目をひかずに運ぶという事はなかったのである。所属諸党の協力関係や活動から独立して、PLCメンバーたちが見せた尊厳ある平和に向けた姿勢を、我々は認める。

(4)

我が組織メンバーの平和と尊厳ある待遇のための新たな機会を獲得するための、デモ、集会、抗議の手紙、宣伝といった国内外の市民社会の大量動員が持つ、持っていた重要性もまた、EZLNは認める。国内外の市民社会と共に、昨年来、我々は正当な要求を解決するために、対話という方法をとるべく献身した。我々は、政府が軍事的方法を選んでも、この道を進んだ。本日、対話と戦争の政治的解決のための新たな場が開かれることを可能にした市民社会に感謝する。我々は約束を守るだろう。

(5)

EZLNは、前述の法の交付に敬意を表し、それに基づいて、連邦政府代表である内務大臣と、CONAIを通じて接触を再開することを宣言する。

(6)

幾千人のメキシコ人の最高司令部たるCCRI-CG/EZLNは宣言する。物理的条件(連邦軍が1995年2月8日の位置まで撤退することを含む)が許すなら、政府代表との直接交渉を再開する。その間に、EZLNは書簡を通じて、内務大臣との対話を再開する。

民主主義！自由！正義！

メキシコ南東の山なみから

CCRI-CG/EZLN メキシコ 1995年3月

CCRI-CG/EZLN声明

メキシコ 1995年3月24日

メキシコ人民へ 世界の人民と諸政府へ
内外の報道機関へ

兄弟姉妹たち

継続されている連邦政府代表との書簡対話に関して、
お知らせする。

(1)

1995年3月12日、我々は内務大臣に手紙を送った。これは、連邦政府とEZLNの直接交渉の再着手のために、尊厳ありかつ安全な状態について合意に達する出発点として、いわゆる「チアパスにおける対話と和解のための法」を我々が受け入れることを示したものであった。この手紙は、1995年3月16日に内務大臣エステバン・モクテスマ・バラカンの元に届いた。

(2)

本日1995年3月24日、我々はCONAIを通じ、「調停ならびに和解協定の対話と交渉の基礎」と名付けられた5ページからなる内務大臣からの1995年3月20日付の提案を、受け取ったところである。まさしく今日この日に、我々は回答している。そしてCONAIに、連邦政府代表に届けてもらう目的をもって、我々の意見、合意、保留、付記といった内容の文書を送っている。

(3)

我々が提案の中で提言した主張は以下の通りである。

A) 現在継続されている書簡対話での論理的帰結から、最初の直接の出会いにふさわしい場所を、以下のように希望する。

1. メキシコ市大司教管区大教会（連邦管轄区域）
2. グアダルルーペ・バシリカ教会（連邦管轄区域）
3. メキシコ国民自治大学（UNAM）キャンパス（連邦管轄区域）
4. 国連組織の所在地（連邦管轄区域）

提案した4つの場所は、対話の物理的空間として重要な、自治的かつ中立という必要条件を備えている。連邦



軍兵士が多量に駐屯して町を封鎖し、加えて、ガルディアス・ブランカス（準軍事警察）が好戦性を増している地帯では、直接の出会いが妨げられるからである。

B) 我々が提案した議題は、5つの項目あるいは5つの大きなテーマからなる。

1. 戦闘が再発する可能性の根絶をはかること。これは、安定した恒久的な停戦の合意を意味する。
2. 全国と州、2つのレベルでの、政治的、社会的、文化的、経済的テーマ。それらのテーマについての基礎的文書は、1994年2月に提示したいいわゆる「EZLN要求声明」であり、我が国の現状に適用される36項目からなるものである。
3. チアパスでの危機についての活動家間の地域的な調停合意。
4. 敵意に終止符を打つ合意。これは、平和、正義、尊厳の合意を意味する。
5. EZLNとそのメンバーの、政治的、社会的参加。

C) 全国的な衝突というテーマは、他の全国の活動家を含んだ全体会議で討議されるべきである。結果として、連邦議会への詳細な提案がなされ、参加者の妥協のもとに作られるべきである。

1. 社会正義、政治的自由、国民の民主主義についてのテーマ。政党、非政府組織（NGO）、国民民主大会（NDC）、社会組織、各個人、専門家が参加する。
2. メキシコ先住民族の政治的、社会的、経済的、文化的諸権利についてのテーマ。先住民族全国大会、先住民族・農民の社会組織、専門家が参加する。
3. メキシコ女性の政治的、社会的、経済的、文化的権利についてのテーマ。女性国民大会 女性組織、各個人、専門家が参加する。

D) チアパス州についてのテーマは、州の活動家その他を含めた全体会議で討議される。チアパスの生活の深い政治的、社会的、経済的文化的改革について念入りな妥協が見出されるだろう。

1. チアパスの社会正義、政治的自由、民主主義についてのテーマ。チアパス人民民主州議会、チアパス州反乱過渡期政府が参加する。

E) 軍隊、警察、法律についてのテーマは、EZLNと政府代表の参加、CONAIの調停、COMCOPAの支援を受けて、全体会議で討議される。

各テーマには、対話、交渉、合意という3段階がある。合意という3段階目になると、全体の妥協が引き出され、信義を重んじる立会人と共に署名される。達成された合意毎に妥協に至るのは、合意が成立していない調停中の項目のせいで、対話が全体で停止させられたり、失敗させられたりしないためである。この方法で、進行は、より早くなり、結果が具体的に明らかになるだろう。

(4)

我々が審議すべき、正義と尊厳ある和平合意の対話と交渉のための基本的議定書と我々が呼んでいる文書についての対話に加えて、政府代表とCCRI-CG/EZLNは、好戦的な雰囲気緩和し軍事攻撃の危険を除去

する、つりあいのとれた相互処置を構じるための提案を
交わす。

(5)

CCRI-CG/EZLNは、この対話の過程において、政府代表団側から配慮と敬意を受けており、同様な
配慮と敬意、そして、紛争を解決するための対話と政治
的交渉の道に従う意志をもって政府代表団に伝えること
を認める。

民主主義！自由！正義！

メキシコ南東の山なみから

CCRI-CG/EZLN メキシコ 1995年3月

EZLN メキシコ 1995年4月3日

(マルコス副司令官書簡)

エステバン・モクテスマ・パラガンへ

CCRI-CG/EZLN マルコス副司令官より

メキシコ チアパス

閣下

本日、1995年3月30日付の親書を受け取った。その中
であなたは、EZLNの政治的意志表示として、第一回
公式会談で対話に着手するための、場所、日程、最低限
度の議題について合意するよう、我々に提案した。あな
たは、CCRI-CG/EZLNの同志たちが、正義と
尊厳ある平和を達成しようとする市民社会の関心と動員
に応じて、対話に応じることを決意したのを知るべきで
ある。政府が会談を達成するために緊張緩和の明確な兆
候を示す、との我々の一貫した要請には、注意が払われ
てはいない。私の同志たちは、こう考えている。結果と
して、どのような平和の創始が提示されるべきなのかの
例を、我々は示すべきだと。こうして同志たちは、安全
と信頼の最低限度の条件が不十分なままに、この第一回
会談を持つことを受け入れているのである。彼らは私に、
緊張緩和措置と平和の発議に関して、あなたの政府に異
議を申し立てるよう求めた。かくして私は、誰が緊張を
緩和し、このメキシコの大地に平和を創出するのか、現
実的しるしを示すのかを見せるよう、あなたが我々と競
い合うよう挑戦する。さしあたって明らかではあるが、
再度、我々は対話の開始を受け入れるにあたって先手を
打っているのだ。

我々の代表者たちの安全のために最低限度の処置さえ
も存在しないにもかかわらず、対話の着手においてEZ
LNから示されたものを、如何に程よく尊ぶべきなのか
を政府が知り、紛争の平和的解決の道が追求されんこと
を、私は望む。

以上 敬意を表して

メキシコ南東の山なみから 反乱副司令官マルコス

1995年4月

CCRI-CG/EZLN声明

メキシコ 1995年4月5日

メキシコ人民へ 世界の人民と諸政府へ

内外の報道機関へ

以下は、EZLNと連邦政府代表との対話について知
らせるためのものである。

(1)

EZLNとメキシコ政府が直接・公式に会談するには
安全とはいえないので、CCRI-CG/EZLNは書
簡対話の提案を送った。その目的は、内務大臣の代表と
EZLNの直接会談に関して合意に達するためであった。

(2)

この種の会談での安全保証の重要性と、起こり得る紛
争を避けるべきことを理解して、内務大臣は我々の提案
を受け入れた。

(3)

熱心な手紙のやりとりの後、CONAIに促されて、
両党間の対話に着手するという問題の多様な解決を熟考
しながら、最終的に本日、両党の代表間の直接対話を行
なうことは可能だとの、真剣かつ丁寧な合意に達した。

(4)

サパティスタ代表者は、与える必要のあるものを理解
していることを証明したのである。その一部が対話への
真実の意志を確固として証明することであり、そして政
治的解決の扉を開くであろう第一回会談の開催に合意し
た。生命、安全、利益の危険を犯して、EZLNは、最
高政府代表者と、すみやかに直接会うことに合意した。

(5)

第一回会談は両者の合意によって、1995年4月9日に
フランシスコ・ゴメス市（オコシンゴ）にあるサン・ミ
ゲル共同農場で持たれる。この第一回会談の議題は、2
つの要点から成っている。

a. いわゆる「正義と尊厳ある和平合意の対話と交渉
のための基礎的議定書」の「原則」を討議することと、
場合によっては、その承認。

b. 着手された対話の次回会談の期日と議題の見通し
を討議することと、場合によっては、その承認。

他の点については、この第一回対話の開会中に提案さ
れ、それぞれの代表団の代表によって、この会議の場で
了解に達せられるものとする。

(6)

EZLNは、この第一回会談を真摯に受諾し、同様の
理由で、CCRI-CGのメンバーによって構成された
高位の代表団を会談に出席すべく任命する。我々の代表
は、議題として合意されている2点について、合意を達
成するための権限を持って出席する。このようにしてE
ZLNは、紛争解決のための対話と政治的調停の道を喜

んで継続するという明白な印を提示しているのである。

(7)

EZLNは、この重要な段階をメキシコ人民に知らせる。いつものように、国内外の報道機関、非政府組織、一般市民が、この第一回会談に出席し、そしてもし着手されたら、対話と交渉の全体過程を注意深く見守るよう、丁寧に招待する。

民主主義！自由！正義！

メキシコ南東の山なみから

CCRI-CG/EZLN メキシコ 1995年4月

サン・ミゲル共同声明 1995年4月9日

チアパス州オコシンゴ市サン・ミゲルにおいて、本日4月9日、連邦政府とEZLNの代表団は会談を行なった。COMPOCAの助力と立会いの下に、CONAIは調停者としての職務を果たした。書簡対話で進展した合意による一致に基づいて、対話の議題は、対話と交渉のための基本原則に関する討議と合意、加えて、次回会談の場所、日程、議題からなるものであった。

両党の達した合意は以下の通りである。

(1)

従来「対話と交渉の基礎」と呼んでいたものを、「正義と尊厳ある調和と和解の合意による、交渉と対話のための基礎的議定書」と呼ぶことで両党は合意した。

(2)

この基礎的議定書の原則から以下の事柄が合意された。両党は、正義と尊厳ある調和と和解のための合意による対話と交渉に加わり、行為と行動の調整を、以下の基本原則に委ねる。

1. 両党間の、全ての処置、交流、接触、行動、了解、合意、もしくは誓約、そして、正義と尊厳ある調和と和解の合意による対話と交渉に、影響を及ぼし得る各自の行動には誠意をもってあたること。

2. テキスト上のトラブルにより不明

3. テキスト上のトラブルにより不明

4. いずれかの党の行動と手抜きが、結果として対話と交渉に反することとなる場合は、該当する党の態度について事前協議することによって相違を明確化する。

5. CONAIの助力を受けて、対話と交渉の妨害、あるいは障害となり得る出来事を克服すること。その一部として、「調和と対話委員会」が法によって示された役割を果たすこと。

6. 与えることで示された意志、すなわち、正義と尊厳ある調和と和解の合意への委任提案、そして、その履行と遂行を保証する力量を立証し成就させるための手続きを生み出し、一致させること。

7. 正義と尊厳ある平和を回復するために必要な誓約を引き受け、先住民族と全メキシコ人が有する権利であ

る自由な環境における進歩と民主主義を促進するための、明確な意志。

8. 対話と交渉に加わる両党の行動においての、妥当な相互関係。

9. 両党が伝達する公示の客観性。公正かつ釣り合いがとれており、宣伝物と明確に区別されること。

(3)

今後の交渉の場所は、チアパス州サン・アンドレス・ララインサルとする。次回会談は、1995年4月20日に、以下の議題をもって行なわれる。

— 相互に釣り合いのとれた緊張緩和の方法

— 「正義と尊厳ある調和と和解の合意による、対話と交渉のための基礎的議定書」に着手するための規定

(4)

この会談とその間に進展した合意により、「チアパスにおける対話、和解、尊厳ある平和のための法」第4条の条件は満たされた。それは、こう述べている。「調和と和解のための合意の進展のための交渉が、この法に関連して続く限りは、(逮捕命令と司法調査の)停止は継続される」。

我々の作業の前進は、正義、尊厳、永続的平和がもたらされるまで、これらの状態が存在し続けるかどうかにかっている。

連邦政府を代表して／グスタボ・イレガス大使、ホルゲ・デル・ヴァリエ代理人、フランシスコ・ファビエル・センテノ代理人

EZLNを代表して／タチョ司令官、ダビド司令官、ラモン司令官、セベデオ司令官、ルベン司令官、フェルナンド司令官、ラファエル司令官

CONAIを代表して／サムエル・ルイス・ガルシア
その他

CCRI-CG/EZLN声明

メキシコ 1995年4月10日

EZLNの同志たる、叛徒たち、民兵たちへ

EZLNを支える人々へ

メキシコ人民へ

世界の人民と諸政府へ

兄弟姉妹たち

今日、この日、我々に名前を与えた闘争に、再び思いを馳せる。正義のために闘争していたエミリアノ・サパタ将軍を『裏切り』が殺した日を、我々は思い出す。エミリアノは死んだが、彼の闘争も想いも死んではない。たくさんのエミリアノ・サパタたちが後に生まれ、そして今や、彼の名は一個人の名ではない。彼の名は、正義のための闘争、民主主義のための大義、自由のための思惟の名前なのだ。我々の中で、我々の武器の中で、マスクで覆われた我々の顔の中で、英知を備え、最も古い先

駆者の闘争と共にある者となった。人々の守護者であり、心であるヴォタンと一体となったサパタは、全メキシコ人の民主主義、自由、正義の闘争に、再び立ち上がった。彼は先住民族の血を受け継いでいるが、ヴォタンたるサパタは、そのためだけには闘わない。彼は、権利も、正当な仕事も、民主主義も、思想や言葉の自由もない、同じ窮乏に生きる先住民族ではない人々のためにも闘う。

ヴォタンたるサパタは、我々の旗の下に進む者全てなのだ。ヴォタンたるサパタは、真実の男たち女たち各々全ての心の中を歩む者である。我々は皆、ヴォタンたるサパタの一人であり、彼は我々の中の一人なのだ。『権勢』と彼の『巨万の富』は、何故サパタが死なないのかわからない。何故、彼が戻って来て、真実の男たち女たちの言葉の中で、死から蘇って生きているのかわからないのだ。兄弟姉妹たち、彼らは我々の闘争を理解していないのだ。『金の力』と『傲慢』は、ヴォタンたるサパタを理解することが出来ない。彼らには理解できない。何故なら『豊かさ』や『権勢』に知性を売り渡した偉大な思想家の理解の範疇を超えた言葉があるからだ。この言葉が『尊厳』であり、これは彼らの頭の中にはないものだ。『尊厳』は心の中を歩んでいる。

今日、『分別』は言う。「先住民族はヴォタンたるサパタになることはできない。別の道があるのだ」と。裏切りの武器をもって、甘く惑わせる言葉で、屈辱的な戦争の脅しで、『権勢』はヴォタンたるサパタをいつでも引き倒し、殺したいのだ。

1521年のこと、彼らはサーベルと虚言をもって、この大地に生きる人々を死と悲しみで覆った。1919年のこと、土地と自由のために武器を持つ手を掲げるサパタの命を『指導』と『策略』は奪ったのだ。『権勢』は、1521年にしくじった。『尊厳』は、先住民族の心の中深く隠され、芽を出して成長する時を待ちながら、大切に育まれたのである。『裏切り』は、1919年にもしくじる。『尊厳』は、死をもって死にはしなかったのである。死をもって、命は、再び真実の男たち女たちの心の中に生き続けたのだ。今日、『虚言』、『裏切り』、『権勢』は再びしくじる。ヴォタンたるサパタは死ななかった。彼はあまた居り、我々の言葉の中に、歩調を合わせているのだ。今日、ヴォタンたるサパタは闘う。EZLNの歩みの中に、民主主義、自由、正義のために。

正義と尊厳を求める我々の声に、『傲慢』は、背信と虚偽をもって応じた。我々の心の中に誤魔化しの温床を作らんとした。無理なことだ。

『権勢』は、今日、こう言っている。服従するならばそれは良い先住民族で、反乱するならば悪い先住民族だ。従順なのは良く、闘うのは悪い。諦めるのが良く、抵抗するのは悪い。自分のことだけを考えるのが良く、兄弟姉妹たちのことを考えるのは悪い。こうして彼らは、サパティスタをお終いにしたいのだ。何故なら、我々は先住民族だから、我々は尊厳を持つから、我々は反乱者だから、我々は闘うから、我々は抵抗するから、全メキシコの兄弟姉妹のために闘うから。

『権勢』は言う。「肌の色の薄い人々は、先住民族に

悪い考えをもたらす。不正義に対して闘うよう語りかけるからだ」。「先住民族に悪い考えをもたらす肌の色の薄い人々は、死ぬべきだ」。「先住民族は、貧困のために死んで、滅びつつあることを良しとし、満足していた。生きるために死ぬののだとして、肌の色の薄い人々は、先住民族に不満と不平をもたらした」と。この『金の紳士』は知らないのだ。この大地の住民たちの肌の色がたった一つだった時、彼らは、真実のために闘争し戦っていたことを。民主主義、自由、正義のための闘争は、一つの肌の色や一つの言語からもたらされるのではない。大地から、死のための尊厳ある命を求める我々の死からもたらされる。今日、先住民族であるということは、尊厳と真実があるということだ。色や言語は、先住民族を定義するものではない。それは、闘争すること、より良くなろうとする欲求なのである。

ヴォタンたるサパタは、全ての色と言語を持っている。彼の歩みは、全ての道に沿って、彼の言葉は全ての心の中に育まれている。今日、彼の最も高潔な言葉は、真実の男たち女たちの言葉の中に、高潔な真実の言葉で話すために声を上げて立ち上がった南東メキシコの先住民族の中にある。

兄弟姉妹たち。我々は皆、ヴォタンたるサパタであり、人々の守護者であり心なのだ。彼らは我々を殺し、我々の声を閉じ込め、真実を隠そうと大きな嘘をつくために、山に追いやることはできる。しかし我々は、いつでも死んでいる。生きるために死んだのだ。我々の声は、語り継がれるだろう。たくさんの人々、たくさんの道を通して、山から、全てのメキシコの兄弟姉妹たちの心へと。我々の真実を覆い隠すことはできない。何故なら、それは、まさに今日、真実の男たち女たちの言葉の中に『窓』を見出した全ての人々の真実だからである。

ツォツィル、ツェルタル、トホラバル、チョル、ソケ、マム、メスティーソの兄弟姉妹たちに挨拶を。大勢の男たち女たちに挨拶を。サパティスタの男たち女たちに挨拶を。ヴォタンたるサパタ、人々の守護者であり心であるサパタに挨拶を。例え傷ついても、我々の心は幸せだ。黙るために話し、さらけ出すために隠し、名前のない我々が名付けられ、ここに居るために行き、すでに歩き、来るために行き、死ぬために生きているから。

エミリアノ・サパタ万歳！

ヴォタンーサパタ万歳！

絶えざる死万歳！

メキシコの先住民族万歳！

EZLN万歳！

民主主義！自由！正義！

メキシコ南東の山なみ、母なる大地の尊厳ある心より
CCRI-CG/EZLN メキシコ 1995年4月

News Briefs

★LTTEと政府の停戦交渉失敗する／スリランカ

スリランカでタミール人居住地域（スリランカ北東部のジャフナ半島を中心とする）の独立運動を続け、政府軍と戦闘を続けているLTTE（タミール・イーラム解放の虎）は、1月5日、政府側との停戦合意文書に署名した。これは、昨年12月になされた停戦への原則的合意と、1月3日からの和平予備交渉再開を受けてなされた。政府側は、ジャフナ半島に対する包囲封鎖を緩和すると言われている。しかし、和平予備交渉は1月14日の第3回以来中断した。2月5日になってLTTEは、「タミール人の安全と尊厳が守られる他の方法が実現するなら、（独立を）再考する用意がある」との趣旨の声明を発表している。4月13日に、政府はジャフナ半島への燃料の禁輸を解除するなどしたが、全体的に交渉は難航した。ジャフナ半島からの政府軍基地の撤去を強く主張するLTTEは、その回答期限を4月18日と指定し、政府側がこれに応じなかったため、19日未明を期して停戦が破棄されたものと見なし攻撃を再開した。トリンコマリー港に停泊中の海軍艦艇2隻を攻撃して爆破した。政府もこれに対して和平交渉での全譲歩を破棄、戦闘状態に入った。LTTEは、21日にもスリランカ東部のポロンナルワ、パチカノア地方の政府軍基地を同時攻撃し、50人以上の政府軍兵士が死亡している。23日には、LTTEに対する一斉弾圧が、コロンボとその周辺で行なわれ500人以上のタミール人が逮捕されている。

★四人解放作戦が成功／コロンビア

2月8日、コロンビアのゲリラ組織FARC（コロンビア革命軍）は、コロンビア南部ブツマヨ州のモコア刑務所の囚人を解放する作戦を成功させた。FARCの部隊は政府職員を装い「刑務所の運営状態の調査に来た」として刑務所内に入り、看守を縛って監房の鍵を奪い、FARCメンバーを含む93人の獄中者全員を解放した。

★政府軍が住民を虐殺／東チモール

今年の1月12日、東チモールのインドネシアからの独立を目指すフレティリンのゲリラと政府軍との交戦が、インドネシアのエルメラ管区的首都ディリから西80キロに位置するガウアナ・コンプレックス村付近であった。政府軍は「部隊からはぐれた6人のゲリラを、待ち伏せ攻撃し、射殺した」と発表。政府軍は、住民に作らせた「特殊部隊」を伴い追掃作戦を行なっている模様。しかし、2月に入って、住民の証言などから殺されたのはゲリラではなく村長を含む一般市民であったことが明らかとなった。政府の人権調査委員会によると、「軍が6人を拘束して拷問。ゲリラの仲間であるとの自白を引き出して射殺した」とされる。

★爆破容疑で2人逮捕／オランダ

オランダのハーグにある社会内務労働省庁舎ビル爆破（1993年6月30日／本紙7号で、爆破声明文を紹介）の容疑で、昨年9月に大規模な一斉捜索がおこなわれた。今年に入って、この時に捜索を受けたグループのうち2人が、共犯者、もしくは声明文を書いたとして起訴された。このデッチ上げ弾圧に抗議して、150の組織、ジャーナリストなどが支援グループを形成し、一斉家宅捜索弾圧に対する理由開示公判の日である1月23日には、ハーグで抗議行動を展開した。

★ムミア・アブ・ジャマル支援闘争

1月13日、殺人をデッチ上げられ死刑判決を受けているブラック・パンサーの元活動家、ムミア・アブ・ジャマルは、収容されていた刑務所から新設のSCIグリーン刑務所（ウエインズバーグ／ペンシルバニア州の南西の端に位置する遠隔地）に移送された。この刑務所は管理・統制の強化を目的とするもので、例えば、監房から出られる時間は、従来の1日2時間（一週間のうち5日）から1時間に減らされる。ペンシルバニア矯正局は、州内の死刑囚185人すべてを、この隔離刑務所に移送する計画である。

ペンシルバニア州知事に就任したトム・リッジは、熱烈な死刑推進論者であるため、すでに死刑囚への死刑執行命令書へのサインを開始している。名簿順位から言うと、ムミアの命は現在、とても危険な状況に置かれている。ムミアの死刑を阻止するために、世界各地で抗議運動が展開されている。

★大使館爆破容疑のパレスチナ人、釈放される

昨年6月のロンドンのイスラエル大使館爆破容疑で逮捕されていた6人のパレスチナ人の内、2人の女性が1月20日に釈放された。残りの女性1人と男性3人は、依然として拘留されている。弾圧に会っているのは、パレスチナ学生生活動家たちである。

★ノルウェーで大量のネオナチが逮捕される

ノルウェーのオスロで、ネオ・ナチが一軒の家を借りた。借りる際には、ネオ・ナチであることを隠し、「ノルウェー文化に興味を持つ非暴力の文化組織」と偽り、「フォーク・ダンスと聖書の学習をする」と称して、家主を騙していた。これを察知したオスロのアンチ・ファシスト・グループは直ちに行動を開始し、2月11日に、この家のあるビルにデモをかけたのである。警察に守られたネオ・ナチは棍棒と盾で武装し、「人種戦争」「共産主義者共は家に帰れ」などと書かれたポスターをもって待ち構えていた。近づいて来た500人のデモ隊に対して、ネオ・ナチは爆竹・石・火炎ビンなどを投げつけて来た。通常なら、ここで警察がデモ隊の方を弾圧するのであるが、今回は様子が違っていた。家主が、「もう、たくさんだ!」と叫んで、警察にネオ・ナチの排除を要請したのである。警察は向きを変え、ネオ・ナチが退去を拒否した結果、ビルに踏み込み、催涙ガスを浴びせかけた。ビルの窓が全て割れ、催涙ガスでビル中が満たさ

れた後、ネオ・ナチは警察に電話して、「平和的明け渡し」を告げたのであった。しかし、時すでに遅く、次々とビルから連れ出され、逮捕された76人のネオ・ナチが地面に並べられていった。逮捕された中には、ネオ・ナチ組織の中心人物も含まれ、また、オスロを根城にする「バイキング」というネオ・ナチ・グループに属する13才位の少年数人もいた。

★イスラエルによるレバノン侵攻の危機高まる

PLOとイスラエル政府による暫定自治合意に反対するPFLP（パレスチナ解放人民戦線）やPFLP-GC（パレスチナ解放人民戦線総司令部派）などの左派勢力とヒズボラなどの原理主義勢力によるイスラエルへの攻撃は依然として継続されている。これに対して、イスラエルは2月初旬からレバノン南部への海上封鎖を開始した。これは2月25日、ベイルート南方18キロの海域まで拡大され、レバノンへのイスラエルによる大規模攻撃が行なわれる危険が生じている。

★ゲリラ容疑のフランス人がボリビアで逮捕される

1990年に行なわれたネストール・パス・ザモラ委員会（CNPZ）による商社員誘拐・殺害に関与しているとの容疑をボリビア当局にかけられていたフランス国籍者が、2月20日にアメリカのマイアミで拘留され、ボリビア当局に身柄を引き渡された。それ以外にも、同年行なわれたラパス（ボリビアの首都）でのアメリカ海兵隊に対する攻撃にも関与しているとされている。

★NDFとフィリピン政府、和平交渉開始を合意

オランダで和平交渉に向けての非公式協議が続いていた、フィリピン共産党（主流派）の統一戦線組織NDF（民族民主戦線）とフィリピン政府は、2月24日、和平交渉の開始に合意した。交渉は6月1日からブリュッセル（ベルギー）で行なわれる予定で、交渉期間中の代表の安全と免責保証に関する協定文書が既に交わされた。

★組織非合法化措置拡大の恐れ／ドイツ

ドイツ内相カンターは2月24日、ネオナチ組織FAP（ドイツ自由労働者党）を禁止し、解散命令を出した。ハンブルクの（州）内相もネオ・ナチ組織国民リストを非合法化した。通常、政党組織の非合法化の是非については連邦憲法裁判所の管轄であるが、今回の2組織に対しては、「憲法上の政党の要件を満たしていない」との憲法裁判所の判断に基づいて、内相の権限である行政処分が行なわれたものである。ネオ・ナチの非合法化の是非は別にして、行政命令による安易な非合法化措置の拡大が今後、社会運動に向けられる恐れがある。

★オランダで反ファシズム活動家大量逮捕

2月25日は、1941年にナチ占領に対して抵抗のゼネストが行なわれた記念日である。この日、オランダのネオ・ナチ組織CP86がデモを行なおうとしていた。当局は、麻薬と犯罪防止を理由として、早くにデモの禁止決

定を出していた。ネオ・ナチがデモを強行しようとしていたため、反ファシズムグループは、これを阻止しようとロッテルダムに結集した。当局はこれに対してもデモをさせないという姿勢で臨み、駅に到着した150人を逮捕した。一方、ネオ・ナチは、「内ゲバ」の結果17人が逮捕され、バット、ナイフ、空ビン、鉄パイプなどを押収されている。続いて3月4日、アンネ・フランクがナチの収容所で死亡した50周年にあたる日にも闘争が組まれた。同じくCP86が当局の禁止措置にも関わらずデモを強行しようとしていたため、反ファシズムグループは再び行動を起こした。警察ヘリコプターが上空を飛び回る大規模弾圧の結果、反ファシズム活動家170人が大量逮捕された。

★ホンジュラスで爆破闘争

3月7日午後、ホンジュラスの首都テグシガルパで、与党・自由党本部などに仕掛けられた2つの時限爆弾が爆発した。「中米連帯運動」の文書が発見されたと、警察は発表している。

★アルゼンチンで警官隊との激しい衝突

1976年から1983年まで続いた軍事政権時代、激しい弾圧によって少なくとも4000人が殺害され、1万人以上が行方不明となった。殺害手段の一つに、活動家を飛行機から大西洋に突き落とす「死の飛行」と呼ばれるものがある。3月2日の現地新聞に当時の加害者である元将校が証言を行ない、この実態が暴露されることとなった。これを受けて3月23日、虐殺に関与した軍関係者のリスト公表を求めるデモ隊が、ブエノスアイレスの海軍技術学校前で警官隊と激しく衝突した。

軍政時代に多くの反体制活動家が拘留・拷問を受けたブエノスアイレスの海軍技術学校前での衝突



★アブサヤフが政府側都市を攻撃／フィリピン

イスラム教ゲリラ「アブサヤフ」（イスラム教運動）は、4月4日、フィリピン・ミンダナオ島西部のサンボアンガ南州のイピル町を攻撃した。MNLF（モロ民族解放戦線）の反主流派「イスラム司令部評議会」も作戦に従事した模様。約200人のゲリラ部隊は、小舟やバスに分乗して白昼の町に突入し、駐屯する政府軍や警察部

隊との激しい交戦となった。この結果、警察署長や歩兵部隊隊長を含む兵士、警察官ら52人が死亡した。戦闘の巻き添えて居住者も死亡したとされる。政府側は報復を開始し、3個大隊を動員して陸・海・空からの大規模な掃討作戦を展開中。

★ボリビアでゼネスト破壊のための戒厳令発布

教育改革、市場自由化反対等を掲げ、3月末から続いていたゼネストを弾圧するため、ボリビア政府は4月19日に戒厳令を発布した。発布直前に、ストライキを指導しているボリビア労働者連盟本部を警官隊が急襲し、労働者を逮捕した。弾圧は続いており、21日の時点での逮捕者は400人を越えている。

★ETAによる爆破闘争／スペイン

スペインのマドリード市内で4月19日、2軒の爆破闘争があった。一件は、ETAによるものだが、右派系野党・国民党のアスナール党首を狙った車爆弾については声明が出ていない。党首の車の近くに駐車していた車に爆弾が仕掛けられており、その爆発で、装甲を施した党首の車も被害を受け、負傷している。

爆破で大破した国民党党首の車（手前）



★CDU議員宅に小包爆弾／ドイツ

4月23日、ドイツ・デュッセルドルフのブランク連邦議會議員（キリスト教民主同盟／CDU）自宅前で小包

爆弾が爆発した。負傷者はなかったが、建物の一部を破壊した。

★環境破壊団体ロビーを爆破／アメリカ

アメリカ、カリフォルニア州サクラメントにある林業振興のための民間圧力団体「カリフォルニア州林業協会」ロビーで、4月24日、小包爆弾が爆発し、職員1人が死亡。同協会は絶滅危険種のフクロウの保全指定区設定に反対するなどしていた。

★強まる反対派弾圧／パレスチナ

PLOとイスラエルの暫定自治合意に反対するPFLP、ハマス等の反対派は、イスラエル占領に対する抵抗闘争を継続しているが、イスラエルは自治交渉進展の条件として、PLOに反対派への弾圧を強めるよう圧力をかけている。自治区での主導権掌握を狙うファタハ等の主流派は、それを受けて激しい弾圧を開始した。

4月9日のハマスとイスラム聖戦による入植者バス攻撃以降、パレスチナ警察はガザ地区で一斉捜索を行い4日間で300人が逮捕されている。また12日からは、銃器保持登録制度を導入し、反対派の武装解除に着手した。パレスチナ警察による人権抑圧も、反対派を押さえ込むために激化している。4月7日には、「ガザ権利と法センター」代表のスーラーニ弁護士が突然解任された。同氏は、パレスチナ高等治安法廷が反対派対策を名目に司法手続きを無視した軍事法廷化する恐れを指摘して、以前にも逮捕されたことがある。4月2日に起きた「ハマスの武器工場誤爆」とされる事件に関しても、警察発表とは異なる当局者談話を発表した新聞記者が逮捕されるなど、広範囲な弾圧が行われている。



世界革命運動情報

 **BURST CITY**
For Revolutionary Resistance

★連絡先 〒606 京都市左京郵便局私書箱57号
ARP

★FAX 075-781-1253

★定期購読料 10号分 3500円

★郵便振替講座

(新) 00920-0-252923 ARP

(旧) 大阪2-252923 ARP